

山紫水明

奉祝 天皇陛下御即位三十年



～半年間の歩み～
第135号

編集後記

精彩したたる青葉の中の風が心地よく感じられる今日この頃、伝統ある『山紫水明』一三五号の発刊となりました。

巻頭の表紙デザインは、前号に続き、お茶目でミステリアスな六人部会長を中心とし、「涼」として制作いたしました。京都府神道青年会にも新しい仲間が増え、その姿に「今年度も頑張つていこう!」と気持ちを新たにされた方々も多いのではないでしょうか。我が京都府神道青年会野球部も近畿地区連絡協議会野球大会にて「優勝」と言う快挙を成し遂げ、京都府神道青年会には今、風が吹いています。野球部の活躍は我々の心に火をつけ、広報委員会も負けてはいられない!! 当会でもSNSを開設し、より多くの方々に当会の活動を広報していけるよう当委員会も一致団結し頑張つてまいります。

また、この度、宮内庁 楽師 久恒 壮太郎先生に特別寄稿をご依頼いたしましたところ、快くお引き受けいただき、誠にありがとうございます。この場をお借りしまして御礼申し上げます。

今回の編集に際し、ご多忙の中、原稿の執筆にご協力を頂きました会員の皆様には深く感謝いたしております。誠に有難うございました。

今後とも多くの皆様のご協力の下、『山紫水明』の編集作業を進めてまいりたいと思う所存ですので、何卒宜しくお願い申し上げます。

〈広報委員会〉



『山紫水明』第一三五号

題字 頼新先生
編集 広報委員会
発行所 京都府神道青年会
発行日 平成三十年六月三十日
印刷 株式会社ユニティ

第一三五号 目次

表紙	1
寄稿「花をさがし」	3
沖縄・京都の塔慰霊祭参拝団研修旅行	6
神職さんと行く伊勢神宮	7
OB懇親会	9
新年会	10
各委員会報告	11
近畿・中央報告	20
編集後記	28



花をさがしに

宮内庁楽師 久恒 壮太郎



この度、ふとしたことから貴誌広報委員長の北川女史より依頼を受け、うかつにも拙い稿を寄せる運びとなりました。

私は宮内庁式部職楽部というところで楽師をさせていたしております。この職場は宮内庁の中で皇室の儀式、外事を司る式部職の中の音楽を専門に取り扱う部署で、雅楽と、明治からは洋楽のオーケストラの演奏もおこなっています。大宝律令によって定められた雅楽寮(うたまいづかさ)に起源を持つとされますから役所の機構の中では最も古い部類に属するのではないのでしょうか。現在二十五名程が演奏家である楽師として在籍し、若干名の研修生である楽生の指導も行っています。

私は平成十年、春に十五歳でこの楽生に採用され、本科七年修了の後に楽師に任官いたしました。九州、福岡県の北西部に生まれ、里神楽の盛んな土地柄、生家の近くにも地域の方々で構成された神楽座がいくつもあったことも雅楽の道を志すきっかけとなったのだと思います。もちろん私の生家は雅楽を受け継いできた楽家、といわれる家でもなく、ましてや九州の田舎からの受験でしたので、両

親はじめ色々な方に大反対をされましたが、今思えば当然のことであつたと思います。自分で電話をかけて問い合わせをしたのですが、楽部でも地方出身者の受験は前例がなかったようで、後から聞いたことですが、ずいぶんと冒険的な採用だった様です。しかし私自身がその大変さに気づいたのはもう少しあとのことでした。

楽生の授業は午前中に三教科、午後に二教科が通常で、ほとんど全てが二対一で行われます。楽部の中に小さな部屋をいただいでそこに一時間ごとに、先生が来て下さいます。私の場合は歌、箏、舞。洋楽ではヴァイオリン、ピアノ、ソルフェージュ。高学年になるとそこに箏、鞆鼓、太鼓、鉦鼓といった楽器も加わりました。一人暮らしのうえ、夜は定時制の高校に通っておりましたので、生活に慣れるまでにはずいぶんと時間がかかりました。特に前日に出来が悪く大目玉を食らった日などは、通勤に使う東京駅で何度も博多行きの新幹線に乗りたくなくなったものです。

修行の辛さ、といったものはどんな世界でも、技能を身に付ける上では、いわば当たり前の事と思いますが、長い歴史を持った音楽にはやはり特殊な伝達方法があり、はじめは大変に戸惑いました。箏に例をとってみますと、入部して初めての稽古で越殿楽の最初の十秒ほどの旋律を先生に唄っていただき、次は一緒に唄い、そのあと自分で唄う、ということは何度も何度も繰り返して少しずつ覚えていきます。もちろん譜面などは見せてもらえず、越殿楽三行を

覚えるのに二週間はかかったと思います。越殿楽が終われば次は五常楽、鶏徳…といったように、筆簞に一切さわらせてもらえず延々と唱歌を繰り返します。師匠から弟子にゆつくりと甕の水を酌み移す様な単調な稽古が続きました。私が初めて筆簞を手に来たのは唱歌を始めて三年ほどが経った頃です。ひよい、と筆簞を渡され、吹いてごらん」と。

ほとんど音を鳴らすことはできませんでしたが、自分の楽器を持てた事が本当に嬉しくて、その日は学校をずる休みしてずっと吹いていたのを思い出します。

学年が進んで参りますと「大曲」といわれる長い曲や「附物」という歌曲の伴奏などを教授されます。筆簞の他にもたくさん教科がありますから覚える量は倍、三倍、と増えてきて布団に入っても唱歌が頭を離れませんでした。

そうした楽生生活が七年間続いたわけですが、もちろん辛いことばかりではなく楽しいこと、嬉しいこともたくさんありました。稽古で、誉められないまでも怒られずに済んだり、試験で良い点をいただいたり(散々な点がほとんどでしたが)共に研鑽する仲間とのたわいもない日常、などおそろくそれらは、普通に学校に行くのと変わりがなかったと思いま



な点がほとんどでしたが)共に研鑽する仲間とのたわいもない日常、などおそろくそれらは、普通に学校に行くのと変わりがなかったと思いま

す。学年も最上級の七年生になり、事実上の任官試験である卒業試験も間近という頃、稽古のあと、師匠が何気なくこんなことをおっしゃいました。

「必ず僕よりもうまくならないさね」とつきには意味がわからず冗談かと思つて師匠を見返していますとさらに、

「そうしないと続かないから」
衝撃的でした。七年間少しでも近づきたいと小さなハードルをいくつも越えながら後を追っていたつもりでしたが、突然目の前にとつもない壁が現れたような、また反対に、急にはしごを外されたような気がしてしばらく思考停止になりました。

そのとき初めて先生は私にも背中が見える所まで降りてきて下さっていたのだということがわかったのです。

それから十数年が経ち、一昨年から私も楽生の筆簞の教授をお任せいただいています。やと少しその時の言葉の意味が分かるような気がする時があります。毎日楽生の部屋を訪ねるたびに、今日はちゃんとやってきただろうか、と心配になりますし、稽古以外の時間に吹いている音が聞こえますと、本当に嬉しいものです。反対に練習不足が明らかだったりつまらないミスが続くと、ついつ



物数をつくし、工夫をきわめて後、
花の失せぬところをば知るべし

白州正子の著作で初めてこの言葉に触れたとき、楽生の時の師匠の言葉に答えを頂いた様な気持ちがありました。たゆまぬ努力を続け、これ以上はないほどに工夫をしつづけて初めて、本当の価値を得ることが出来る。先人からの無数のこうした研鑽の積み重ねそのものが、伝統というものの本質ではないか。そんな風感じました。私は今年三十五歳になりました。当時、私を教えた下さった師匠がたに、年齢も技術も遠くおよびませんが、いつの日か、私なりの失せぬ花を手にすることができたら、その時初めて無数の先人達の方に加えていただけるような気がしています。

講師紹介

宮内庁 楽師・久恒 壮太郎 先生

平成十年 式部職楽部本科楽生として入部
平成十七年 楽師任官後、宮中行事をはじめ、
国立劇場や海外での公演などに参加



い語気が荒くなつてしまいます。できれば怒らずに済ませたいのは誰でも同じですが、本番になれば誰も代わつてあげることはできません。少しずつでも確実に力を付けてほしい。どんなに絢爛な舞台でも、しっかりとした技術の裏付けがなければ、そこは地獄になつてしまいます。

楽師になつてから私も様々な失敗をし、恥をかきました。本来あつてはならないことですが、やはり人間がやる以上、ゼロにはならないことです。それでも次こそは、という気持ちで何とかやって参りました。そんな時の原動力はいつも、楽生時代の無数の失敗でした。私達はときに、伝統を守っているのは素晴らしいですね、という風におっしゃっていたり、事があります。大変に嬉しく光栄ですが果たして自分は伝統を守れているだろうか、との疑問も生まれます。長い歴史を持った、格式ある音楽だけに、たくさんのしきたりや慣例、倍する例外も含めて体に染み付くまでには相当の時間を要します。それだけに、その中に入つてしばらくすると、とても居心地がよくなつてしまい、研鑽の日々を忘れてしまいがちになるのです。

この曲は前にもやったから大丈夫だろう。失敗をするのはいつもこんな考えの時です。恥ずべきは失敗よりもこのような惰性である、とわかつてはいてもです。何度となく吹いた曲でも初めて唱歌をした時のように、初めて筆簞に触れた時のように、瑞々しい気持ちで吹くことができたら。

世阿弥のいう「初心忘るべからず」とはそういう意味ではないでしょうか。

世阿弥の言葉で、私がもうひとつ、いつも心にどめている言葉があります。



沖繩・京都の塔慰霊参拝団研修旅行

去る十二月十一日及び十二日の二日間、神道政治連盟京都府本部主催の沖繩・京都の塔慰霊参拝団研修旅行が行われ、梶道嗣本部長を始め、総勢三十名が参加した。

初日は那覇空港に到着後、沖繩県護国神社を自由参拝。昼食後、那覇国一宮・波上宮にて正式参拝をさせて頂いた。波上宮では本殿裏の遙拝所をご案内いただき、沖繩独自の信仰を少しだけ垣間見ることができた。



その後、本研修旅行最大の目的である宜野湾市嘉数高台公園に建つ京都の塔の前にて慰霊祭が斎行された。当日は天候にも恵まれ、長岡天満宮・有持圭祐会員が皆をお祓いし、齋主・後藤重和神政連京都府本部副本部長が祭詞奏上。御嶽教末廣教会・北川真喜子会員、石清水八幡宮・河谷真里会員が百合の花を手に「常永遠の舞」を奉納し、京都府出身の沖繩戦戦歿者二五三六柱の御霊を慰さめ、厳粛に



等を見学し、域内の神聖さを感じることができた。このような普段観光では行けないような場所を多く訪れる事ができ、大変実りのある充実した研修旅行であった。

(八坂神社 東條貴史)



神職さんと行く伊勢参宮

去る二月二十七日、京都府神社庁主催「神職さんと行く伊勢参宮」(京都府神道青年会共催)が開催され、当会からは六人部会長をはじめ六名が参加した。

この伊勢参宮は学生さんが対象であるが、春休みに入りたてである血気盛んな二十歳前後の若者たちが、往復六時間を費やし参拝旅行に行くのだろうか？当日はバスの席も空いているだろうか？そんな不安を抱きながら集合場所へ向かうと三十四名もの学生さんが参加してくれ、私の予想を遥かに越えていた。

バスが出発し、林 秀俊副庁長の挨拶中も学生さんたちは一心に耳を傾け、彼らの気持は既に伊勢の神宮に向いているのであろうと感じると同時に、六人部美恵子・松井三紀両神社庁教化委員の明るいパワーに、朝から眠たがっている自分が情けなくなつた。バスの中では神宮について映像が流れており、学生さんのみならず引率の神職たちも皆食い入るように画





去る十一月二十九日、組織・親睦委員会共催による「OB懇親会」が開催され、当日はOB会員十四名、会員四十一名、計五十五名の参加を得て「がんこ高瀬川二条苑」にて盛大に行われました。

今回は例年より一層親睦を深める為、従来OB席と会員席で分けていた席を相席にしスタート致しました。

OB懇親会



緊張の面持ちの会員も多々見受けられました。時間が経つにつれOB会員の諸先輩と交流を深めていき、各席非常に盛り上がりを見せました。

恒例の余興は、六人部会長の指揮により親睦委員を始め執行部・役員が会歌を合唱し、現役時代さながらにOB会員も合唱して下さい参加者全員が一つになった素晴らしい光景でした。



OB会員の先輩方から温かいお言葉をかけて頂いたり、また現役時代のお話を聞かせて頂いたり、貴重な時間を過ごした懇親会となりました。

(北野天満宮 湯浅和雅)



報課長様が出迎えて下さり御正宮までご案内して下さいました。大正天皇御手植松のお話などを始め、学生さんたちには問題を出題し、その答えが実は先程説明されたことと関係していたりと、引率として参加した私が勉強させて頂き、ご説明に心を奪われていった。

その後、厳粛な空気が流れる御正宮での御垣内参拝。緊張が解けぬまま向かった神楽殿での御神楽奉納。学生さんたちは、正座での足の痺れが気にならない程の貴重な経験をしたのではないかと思います。

そして待ちに待ったおかげ横丁散策である。先ほどまでとは違い皆足取りが軽く、どんなに真剣に参拝していてもやはり学生さん。強張っていた表情が一変し、楽しいことが一番なのだと思いつつ、実は我々引率者がおかげ横丁散策に向け、早歩きしていることに本人たちは気が付いていない様子であった。各自思い思いにおかげ横丁を散

面を見ていた。

伊勢の地に到着し、まず向かったのは外宮である。自由参拝ではあったが纏まって御正宮へ向かう。手水舎の前で神社庁 中森録事が学生さんたちに手水を促すと、正しい作法で手水を行う姿に感心した。

神宮会館で昼食を取り、いよいよ内宮への参拝。宇治橋前では神宮司庁・音羽悟広



策した後、最終目的地である神宮徴古館へ。展示されている数多くの宝物類に皆魅了されている様子であった。

浄らかな空気に包まれている伊勢の神宮。幾度となく足を運んだことのある私たちでさえもそう感じる。今回の伊勢参宮をきっかけに、また参拝したいと思う学生さんが一人でも増えることを願いたい。

(平安神宮 室川豊史)

平成三十年 新年会

去る二月八日、十九時よりホテルグランヴィア京都に於いて当会新年会が開催された。

開式にあたり六人部会長が挨拶を述べ、ご来賓を代表いただき京都府神社庁長ご代理として参事 中嶋茂博様にご祝辞を賜った。その後、京都府氏子青年連合会会長 武本延美様から乾杯の発声を頂き、新年会がスタートした。



歓談の中、親睦委員会が各席にビンゴカードを配布し、出た番号がカードにあればアウトというスピーディかつ画期的な「逆ビンゴ大会」が行われ、一同景品を狙うべく盛り上がりを見せた。最後に生寫紀之副会長が閉会の辞を述べ、散会となった。

(伏見稲荷大社 安藤孝信)



委員会報告

教化委員会

七五三の集い



小雪の中頃を過ぎた十一月二十九日、本年も教化委員会主催による「七五三の集い」が「平成の御修造」を終えた護王神社に於いて開催されました。この事業は児童養護施設の子供達を招いており、市内四ヶ所より総勢二十二名の子供達が集まりました。

六人部会長による開会の挨拶の後、子供達は本殿にて厳かな空気の中、緊張と好奇心の入り混じった面持ちで

ご祈祷を受けました。千歳飴を一人ずつ神職から手渡しされた時、笑顔が戻り喜んでる姿が印象的でした。催し物は、毎年好評の石清水八幡宮・田中会員によるジャグリング

と、伏見稲荷大社・守分会員によるバルーンアートが披露されました。日頃の練習の成果を惜しむことなく発揮した見事なジャグリングの技に驚いたり、ポニョやトロロが生み出されるバルーンアートに大きな歓声が上がったりと最後まで子供達の心を鷲掴みにし、盛況のまま閉会致しました。

(賀茂別雷神社 神山拓也)

